

# 明治期における女子体育教員養成機関に関する歴史的研究

— 東京女子体操音楽学校，日本体育会体操学校女子部，女子高等師範学校国語体操専修科の比較研究 —

掛 水 通 子

## はじめに

我が国における体育教員養成は明治11年に体操伝習所ではじまり，以後東京師範学校体操専修科や，日本体育会体操学校，各種の私立体操学校で行われてきたが，女子が入学できる学校は明治35年までなかった。明治30年代になり，「女子にも体育を」の声が高まり，「女子体育は女子の手で」と主張されるようになり，その実現のために，明治35年5月に私立東京女子体操学校<sup>1)</sup>(11月に私立東京女子体操音楽学校と改称)，明治36年1月には日本体育会体操学校女子部と女子高等師範学校国語体操専修科<sup>2)</sup>が相次いで設立され女子体育教員養成の途が開かれた。明治期はこの3校が女子の体育教員を生み出すことになるのである。本稿では3校の設立経緯，設立目的，教育，教員，卒業生とその就職先を比較検討し，わが国女子体育発展の過程で3校が果たした役割を考察したい。

### 1. 設立経緯

女高師国語体操専修科は従来からの女高師内に新しい科を設置したものであり，日本体育会体操学校女子部も同様である。東京女子体操音楽学校は新設された学校であるが，その母体である日本遊戯調査会の活動は明治26年からすでに始まっていた。したがって3校とも明治30年代に高まる「女子体育は女子の手で」に対応できる素地があった。

女高師国語体操専修科は我が国初の体育を学ぶために派遣された女子留学生，井口あくりの帰国(明治36年2月)を待って，明治36年1月に設立され4月から授業を開始したものである。井口の留学は女子体育に関する根本的計画を持っていた女高師校長高嶺秀夫の推薦によるもの<sup>3)</sup>であるから井口の渡米した明治32年から設置計画はあったとみてよいであろう。

日本体育会は明治24年の設立時の「日本体育会ノ要旨」の補則で，「女子ノ体育ノ良否ハ忽チ生児ノ強弱ニ関シ生児ノ強弱ハ即チ遠ク国家ノ命脈ノ盛衰ニ関スルモノナレハ其影響スル所決シテ少小ナラス因テ本会ハ男子ノ体育ニ次テ更ニ女子相当ノ体育(体操薙刀及其他女子体育ニ適スル種類)ヲ計画シ」<sup>4)</sup>と，女子体育振興計画を持っていたが，当初からの体操教員養成

のための体操練習所（明治33年5月に体操学校と改称）に女子の入学は認めていなかった。明治32年5月に諸事業のなかの一つである体操場に「女子部」が増設され、それは模範体操場の「女子遊戯部」を経て「女子遊戯講習会」となり、明治36年1月に体操学校女子部の認可を受け4月に開校したものである。<sup>5)</sup> したがって日本体育会体操学校女子部は明治24年から持っていた女子体育振興の目的を明治32年から具体化しはじめたものといえる。

3校の中で最も早く開校した東京女子体操学校の設立の際の母体となった日本遊戯調査会は西村正三郎を主幹として明治26年11月に設立され日本遊戯の調査研究を行っていたがそれは「鼓吹するの時機なき」<sup>6)</sup> もので明治29年の西村の死後は低迷を続け明治30年には休会の状態になった。この年6月には会の中心であった高橋忠次郎<sup>7)</sup> は小学校体操科の教員と高師附属音楽学校の体操科講師から香川県尋常師範学校助教諭兼書記へと転じた。高橋が日本体育会体操練習所へ招聘されることになり上京してくるのが、2校が女子体育教員養成へ向かって胎動していた明治32年であった。そして高橋はこの2校へ職を得るのである。明治32年6月から明治36年9月まで日本体育会体操練習所（体操学校）で遊戯の教師をつとめ遊戯研究をすすめる。女子部の教員には名を連らねていないが、明治33年5月には「音楽応用体操遊戯法」を依田直伊との共著で出版しているように、高橋は数年に渡って西村正三郎の「女子体操ハ須ラク楽器ヲ使用シテ興味ヲ副フベキ」<sup>8)</sup> という教えから、女子体育の研究をすすめていた。明治33年12月には坪井玄道の欧米留学のための後任として、女子高等師範学校の体操科教師を嘱託され、明治36年の坪井の帰国後もそのまま留った。明治36年2月には井口が帰国しすぐに、教育・体操担当、国語体操専修科生取締の任にある教授として着任しスウェーデン体操を導入しはじめるのである。はや7月には正八位に叙位され全国に名声を轟かすようになる。

日本遊戯調査会の再興は高橋が2校に職を得た後であり、明治34年9月25日には「遊戯雑誌」を創刊する。この会により明治35年4月開校を目標に準備がすすめられた。設立を企てたのが高橋であった。高橋の企画に対して日本で初めての学校だから志願者が少ないであろう、卒業しても使う所はないであろうと賛成する者は誰もいなかったが、高橋は「諸君の忠言は誠に辱なく思ふ併し『未だ時節が早いから止めよ』とは我意に入らない話である。諸君は時節が来たら創立せよとの意ならむ、僕は所謂世に先だって憂ふるものである。此度の企業たるや決して金銭上の利益より計画したのでは無い、実は僕は一両年中には必ず渡航を企てる者だが、サテ今日まで十有五年の間斯道に儘瘁した我輩も何の名もなく転職するのも不本意である。如何かして我国体操界の歴史の中に特筆大書は出来まいが其幾分たりとも斯界に尽されたと言ふことを後人をして知らしたい夫れには本邦の女子体操学校が何よりの記念碑であると思ふて決心した訳で幾ら金銭上に於て損耗をすとも素より覚悟である此の損耗たる予に採りては予が斯界に儘瘁したと言ふことを長へに広告するので広告料を支払ふのだと思へは大丈夫であるから諸君は先ず創立するとして十分なる御副心を願いたい」<sup>9)</sup> と答えたのである。このことから、女子体育教員の必要性は、例えばすでに明治29年に成瀬仁蔵が、女学校には医学、体操学を修めた女子の体操教師を要す必要があると述べたように叫ばれてはいたものの、現実には入学者がいるか、就職先はあるのかと危惧されていた事、高橋は日本体育会体操学校教師と女高師の嘱託教師であったが、何か歴史に名前を残したいと考え記念碑として東京女子体操学校の設立を計画した事がわかる。

井口の帰国を控え、女高師に国語体操専修科の設置が間近い事、さらに、日本体育会の「女子遊戯講習会」も近く体操学校女子部となり教員養成を始める事を察知していたのであろうか。両校より一足早く明治35年5月10日には我が国初の女子体操学校として、一私学として、私立東京女子体操学校は誕生したのである。同年11月には併設を考えていた東京女子唱歌学校と合体して私立東京女子体操音楽学校として歩みはじめる。

高等女学校の体育は明治28年1月の高等女学校規程で「普通体操若シクハ遊戯」の体操科が必修となり、明治36年3月の高等女学校教授要目では「普通体操及遊戯」が各学年一週3時間の必修となり「体操ハ成ルヘク女教員ヲシテ之ヲ教授セシムベシ」が示される。3校がこの女教員を養成していく事になるのである。

## 2. 設立目的

女高師は、女子師範学校と高等女学校の教員を養成し兼て普通教育と幼児教育の方法を研究することを目的としており、専修科は「教員の欠乏を充たす為に特別の必要がある場合」に設置されるものであった。国語体操専修科は、体操科の教員の欠乏のために設けられたが、「体操科を主とすれども、一は学習者の修養上の為に、又一は当時に在りては体操一科のみの女教師に在りては採用の際不便なるべきを察して国語科を併せ課したるなり」<sup>10)</sup>と、校長高嶺は兼修方法をとったのであった。卒業生は文部省検定試験を受けずに女子師範学校、師範学校女子部、高等女学校の教員になることができた。

日本体育会体操学校女子部は明治36年4月に設置されたのは普通科であり、小学校体操科教員の養成を目的としており、小学校体操科教員の無試験検定が認められていた。<sup>11)</sup> 明治37年4月に設置された高等科は高等女学校の体操科教員の養成を目的としていた。高等女学校体操科の無試験検定が認められるのは大正12年になってからである。他に検定受験のための受験科や教員を目的としない選科も設けていた。<sup>12)</sup> 女子部そのものは体操科の教員養成であったが、普通科は午後3時からの授業、高等科は午後2時からの授業で「午後の教授なるを以て他の学校と兼修する事を得べし」<sup>12)</sup>と女高師国語体操専修科と同様に兼修をすすめており、実際に生徒の多くは兼修していた。<sup>13)</sup>

東京女子体操学校は「学校設立願」<sup>14)</sup>によると、本科は女子師範学校、高等女学校、女子小学校の体操教員を養成することを目的としており、併設の東京女子唱歌学校との兼修ができた。研究科は志望によるものである。明治35年11月に唱歌学校と合併して東京女子体操音楽学校となり、体操科と音楽科に分かれ、それぞれ女子師範学校と高等女学校の教員を養成することを目的としており両科を兼修することができた。募集広告には女子小学校の教員養成も書かれているが公文書にはみられない。このころの募集広告をみると、「本校生徒は女子高等数学院に入り兼修することを得」<sup>15)</sup>、「本校は数学女学校教員程度を兼修するの便あり」<sup>16)</sup>と示されている。学校は午後からの授業であったため、他の2校と同様に体操と音楽に加えて数学との兼修まで用意していたのである。その後の明治38年7月の規則を見ると、体操科と音楽科と合わせて本科とし、女子師範学校、師範学校女子部、高等女学校の体操、音楽教員の養成を、別科で小学校の体操音楽教員の養成を目的としていた。他に選科、研究科があった。明治40年3月21

日の「学則改正願」<sup>17)</sup>でも本科，別科に変わりはない。明治41年2月にはこれまでの6ヶ月の修業年限を本科のみ1年にする改正<sup>18)</sup>が行われ，本科を第一部と改め目的は同様であるが，文部省検定試験の予備教授をすることを示した。別科は二部本科とした。二部本科終了後に研究科を設け，さらに一部と同様の資格を取りたい者がこれを修めた。体操科の無試験検定が認められるのは大正14年以後である。

このように，女高師国語体操専修科は体操と国語を，日本体育会体操学科は体操と他校でさらに何かを，東京女子体操音楽学校は，高橋の「音楽を応用した体操」を実現するための体操と音楽に加えて数学を，と3校共兼修の道をとっているものでありこれは高嶺の述べたように，修養のため，就職のためである。明治期においては，まだ体操科のみの教員での自立は難しかったことを示すと同時に，体育の置かれた立場を示すといえる。

### 3. 教 育

女高師国語体操専修科は修業年限が最も長く2年である。しかし女高師本科4年に比較すると短期養成である。学科課程<sup>19)</sup>をみると，各学年を3学期に分け，2年の3学期のみ週24時間で，他は週28時間である。倫理（週2時間，2年の3学期は1時間，以下（ ）内の時間を略す），教育（3，2年の3学期はなし），国語（9），漢文（3），習字（1），生理（2），体操（6），音楽（2）で国語関係の学科が13時間を占める。体操は第2学年1学期までは普通体操・遊戯を5時間と体操の理論を1時間である。2年の2，3学期は普通体操・遊戯を6時間課した。しかし，普通体操よりも井口により，スウェーデン体操を中心にして教授された。

日本体育会体操学校女子部の普通科は修業年限1年で午後3時からの授業であった。学則は不明であるが，男子から兵式体操関係を除外した科目と推測<sup>20)</sup>されており，倫理（1），教育（2），解剖生理衛生付救急療法（3），普通体操に関する学科（1），普通体操（10），遊戯（2），唱歌（2）<sup>21)</sup>で，女子部の教員組織からこれに薙刀体操が加わった学科であろう。高等科は1年半の年限で男子に準じてみると，国語（2）が加わったもので大差ない。午後からの授業は，当初は成女学園，明治38年4月からは精華学校の授業が終わった後の校舎を借りた<sup>22)</sup>ため生じたものであり，大正末期まで続いた。

東京女子体操音楽学校は明治41年から第一部は1年間の年限になるが，他は6ヶ月という短期養成である。学科課程は，開校時，倫理，国語，教育，家政，救急療法をそれぞれ週2時間，解剖，生理，衛生（4），普通体操（9），体操に関する学科（1），遊戯（9）であり，本科の普通体操は矯正術，徒手，球筭，体操に関する学科は造機学，遊戯は，舞踏，普通遊戯を課し，研究科の普通体操は，啞鈴，棍棒，薙刀体操，体操に関する学科は同様で遊戯は舞踏と高等遊戯である。<sup>23)</sup>音楽は併設の東京唱歌学校で修めるために学科には含まれていない。明治35年11月からの体操科は，倫理，教育を各2時間，生理（4），解剖衛生（2），体操（12），舞踏，遊戯（10）で，体操は普通体操を，舞踏，遊戯は円舞，方舞，対舞，普通遊戯一班を課した。音楽科は倫理（2），教育（2），家政（1），音楽（18），遊戯（8）<sup>24)</sup>であり，両科の兼修が可能であった。両科の合併後の本科は明治38年7月の学科によると，倫理（1），教育（2），国語（2），家政（1），生理（3），体操理論（1），音楽理論（1），和声

学(1)、体操(13)、遊戯(6)、音楽(7)で別科は和声学を課さず倫理を1時間加えたものである。体操は、普通体操、瑞典式体操、薙刀体操を、遊戯は、児童遊戯、高等遊戯、室内遊戯、舞踏である。他に随意科として、生花、抹茶、琴、礼法、漕艇、自転車、乗馬<sup>25)</sup>をあげている。

明治40年3月の改正<sup>26)</sup>では、本科は国語、家政学、和声学がなくなり他は同様の配当である。体操理論は体育理論と名称を変え、体育理論を体操発達史と示し、体操は単個演習、連続演習、薙刀体操で、遊戯は戸内遊戯、戸外遊戯と示された。別科の時間も大差ないが、体育理論は体育理論ノ初歩、遊戯は児童遊戯としている。明治41年2月の改正<sup>27)</sup>でそれまでの本科を第一部とし修業年限1年に延長した。学科は、40年の改正でなくなった国語と家政学が復活し、新しく英語が随意科として加わり、体育理論は体育原理となり体育原理、体育史、遊戯組織法と示し、週2時間に増加した。生理は週2時間、体操は週10時間に減じ器械演習、実地教授が加わり、遊戯は時数は変わらず6時間で、高等遊戯、児童遊戯、実地教授と示している。別科は第二部本科となり年限は6ヶ月のみである。第一部に比して体育原理と遊戯が1時間少なく、体操が2時間多い。内容をみると、遊戯組織法、器械演習を課していない。音楽は、第二部本科が、単音唱歌、複音唱歌、オルガン練習で、第一部はそれに、ピアノ練習、バイオリン演習、実地教授を加えたものである。

東京女子体操学校は当初、小石川区上富坂町の独逸神学校の校舎を午後だけの使用で借りたものであるから、体育会女子部と同様、午後からの授業である。しかし、「午後だけ借りる校舎の費用を三十円出すと言ふ事は出来ないということから二ヶ月計り借りて寄宿舎制度」<sup>28)</sup>をとり小石川区茗荷谷、さらに明治36年3月には麴町区飯田町へ移転するが、「麴町の学校は、個人の家を改造したもので畳敷きでした。建物も庭もとても狭くて九段坂上の小学校を借りてそこでやっておりました」<sup>29)</sup>とやはり午後から借りていたのであろう。この年6月の神田区仲猿楽町の移転先も帝国女学校の住所であり、さらにまた、同年9月に麴町区富士見町へ、同年末には茗荷谷へ戻り、明治37年6月には下谷区谷中真島町へ、明治38年8月には北豊島郡日暮里町1088へ、明治42年4月には下谷区三崎町へ、明治43年4月には日暮里町1054へ移る。これらは「明治40年から私は女史の体操音楽学校の講師を頼まれた。其頃学校は日暮里にあったが其後財政の困難に陥り、借家をして其近所を2回移転した」<sup>30)</sup>と経営困難によるものであり、「学校は私が面接に参りましたとき下宿屋みたいな平屋の建物で生徒も十二、三人庭もなく、それはみすばらしいものでしたが、すぐ日暮里の道灌山の近所に引越しこの方は庭も広くて結構でした」<sup>31)</sup>と良くなるが、この学校も「初めて日暮里の学校を探しに出かけましたが、率直に言って学校らしいものが見当らなかったのであちこち歩きました。(中略)点在するのは平屋が殆んどで、唯一つ古い二階屋がありました。(中略)実のところ心がはげしく動揺しました。これが学校であるのかと……」<sup>32)</sup>というように全寮制の学校ではあるが民家を借りたものであった。このように他校を借りての午後からの授業から全寮制での全日授業へと移って行くが、明治期における東京女子体操音楽学校は私塾的なものであった。

このように、女高師国語体操専修科は修業年限は2年間と長い、国語関係の時数が多く体操遊戯関係の時数が少ない。半年と修業年限が短い東京女子体操音楽学校は体操遊戯関係の時数を多くしており、3校の体操遊戯関係の時数でみる限り大差ない。東京女子体操音楽学校も、

明治41年以後は他校に劣るものではなくなった。女高師国語体操専修科は井口によるスウェーデン体操に、東京女子体操音楽学校は高橋による遊戯と音楽に力を入れている。日本体育会体操学校女子部は校舎を借りての午後からの授業、東京女子体操音楽学校も校舎を借りての午後からの授業から寄宿制度による全日制になったとはいえ私塾の域を出ないもので、女高師国語体操専修科には劣るものであった。それは女高師国語体操専修科のみが、文部省検定を受けずに高等女学校、師範学校の教員となる資格を与えられていたことからもうなづけるのである。

#### 4. 教 員

3校は体操遊戯関係の学科で見ると大差ない教育を行ってきたが、それを担当した教員はどうか。

女高師国語体操専修科の体操を担当したのは帰国してすぐに教育・体操担当（明治41年からは生理・体操）で、国語体操専修科生取締の井口あくりであった。井口は4期8ヶ年間の国語体操専修科生を送り出すと結婚のため退職する。女高師の体操は井口の他に高師との兼任教授である坪井玄道（明治42年に退官）、当初助教授で明治37年には教授となる山口西三郎、明治39年末に退くまで嘱託の高橋忠次郎、そして坪井に代わって高師との兼任教授の永井道明が担当しており、国語体操専修科が卒業生を出してからは1期卒業の今井タイ、瀬尾えい、大平フジエ、2期卒業の早川イク、3期卒業の中村愛らも附属小学校、附属高女の助教諭、助教授、あるいは嘱託として母校に職を奉じ体操を担当<sup>33)</sup>した。

日本体育会体操学校女子部の設立当初は、校長高島平三郎が倫理を、成女学校の宮田脩が教育を、女高師の井口あくりが生理を、高見沢宗蔵が普通体操を、華族女学校の小野泉太郎が遊戯を、小沢卯之助が薙刀体操を、石橋蔵五郎が音楽を担当<sup>34)</sup>している。明治41年4月の教員をみると、精華学校の寺田勇吉と湯本武比古が倫理を、川瀬元九郎が体育原理を、高師の可児徳が体操学科、体操術科を、小野泉太郎が体操術科、遊戯を、石橋蔵五郎と坪内が音楽を、小沢卯之助が薙刀体操を担当し、他にも田代、児玉、井上、津江、佐土原の名前がある。<sup>35)</sup>日本体育会の教師の他に他校からの兼務者が多いのである。

東京女子体操学校は当初23名の教師を「講師」として連らねている。実際にはもっと少数であろう。これらは他校との兼務者がほとんどである。全教科で見ると、日本体育会体操学校3名、東京府女子師範学校3名、東京高師2名、女高師2名、他は1名ずつで、東京師範、東京府立三中、東京府立二高女、同三高女、華族女学校、愛日学校、家庭教師等である。これらは全て東京女子体操学校の賛助員でもあった。体操、遊戯、音楽関係を見ると、日本体育会の高見沢宗蔵、松田正典は体操を、日本体育会と女高師の高橋忠次郎は監督兼舞踏を、女高師の山口西三郎は生理を、華族女学校の小野泉太郎は体操遊戯を、東京高師の可児徳は体操、生理を、東京府立三中の岡田英定、東京府女師の大塚治八、佐藤喜志太、東京府師範の依田直伊、東京高師の津崎亥久生、東京府立三高女の宮尾宇吉は体操を、愛日学校長の小沢卯之助は薙刀体操を、東京音楽学校の山田源一郎と同校卒業の桜井信彰は音楽を担当している。<sup>36)</sup>日本遊戯調査会の主幹は当時高橋忠次郎で、依田直伊、小野泉太郎、可児徳、山口西三郎が中心人物であっ

たが、全員講師を勤めたのである。明治36年10月卒業の崎田が、「井口あくり先生からはスウェーデン体操の手ほどきを受けました」<sup>37)</sup>と述べるように、帰国した井口あくりも教師をつとめたのであった。明治38年の規則には監督の高橋以下12名の名が記されているにすぎない。当初からの者は、高橋、可児、佐藤であり、太田勘七(ピアノ)、山本祐吉(舞踏、体育会教師)、松野勇弥、谷口謙造(日本体育会出身)、熊谷 助、林田巖、矢野フサヨ、稲岡シゲ、そして藤村トヨが加わった。創設当初の講師たちは賛助員として留まっている。高橋の渡米後の明治43年10月の卒業生によると、創設当初からの山口、可児、小沢と後に加わった太田、森田正馬、藤村である。藤村トヨは明治41年に東京府から出された廃校命令を女高師時代の恩師、町田則文、坪井玄道の努力によって撤回し学校を再興して校長の任につく。坪井玄道は明治42年の退官後は、「身ヲ講師ノ席ニ在ッテ校長ヲ補佐シ懇切熱心ニ教鞭ヲ執ラレシ」と創立者、校長の高橋が去った後の学校を助けるのである。このころは同時にこれまでの坪井玄道による普通体操から永井道明によるスウェーデン体操へと体育界は方向を変えていた。しかしこの後の藤村はスウェーデン体操を批判し、普通体操を支持していった。明治末期は、大正2年3月卒業の吉井によると、原理や実技を山口、可児が、徒手体操その他を藤村が、心理学を森田が、解剖を中島が、国語、漢文を岩波茂男が、声楽を立花房子が担当している。

したがって東京女子体操音楽学校の教員は当初は高橋を中心とした日本遊戯調査会の重要会員たちであり、当時のわが国体育界の一流教師たちであった。高橋の渡米後は、藤村校長、坪井と、当初からひき続き任にあった山口、可児がその中心であった。

表 1 3 校 の 教 師 の 兼 務 状 況

	東京女子体操音楽学校					日本体育会体操学校女子部		女高師
	明治35年	36	37-38	42-43	明45-大2	36	41	36-44
高橋忠次郎	監督兼舞踏	高等遊戯(監督)	監督(本校創立者)(設立者)	(アメリカ合衆国シアトル滞在)		(36年9月まで男子部教師)		体操科嘱託(39年まで)
井口あくり		スウェーデン体操				生 理		体操科(生理、教育)教授(国語体操専修科生取締)
坪井 玄道				(講師あるいは校長を補佐)				体操科教授(42年まで)
山口西三郎	生 理			遊 戯(ダンス)	原理や実技			体操科助教授-教授
可児 徳	体操・生理	舞 踏・行進遊戯	教 師	体 操	原理や実技		体操学科 体操術科	
小沢卯之助	薙刀体操	薙刀体操		薙刀体操		薙刀体操		
小野泉太郎	体操・遊戯					遊 戯	体操術科 遊 戯	

注) ・東京女子体操音楽学校は本文中に示した、35年4月25日遊戯雑誌6号、36年卒業生、37年6-38年8月に書かれた規則、43年卒業生、大正2年卒業生による。  
 ・日本体育会体操学校女子部は日本体育大学80年史による。  
 ・女高師は各年女高師一覧による。

ここで3校の兼務状況を整理してみると、表1に示したように、明治期における女子体育教員養成に当たった教師たちは兼務している者が多い。井口も3校で教え、女高師退官後の坪井は東京女子体操音楽学校に力を入れ、山口は女高師と東京女子体操音楽学校で、小野、小沢、可児は日本体育会体操学校女子部と東京女子体操音楽学校で教えたのである。高橋が東京女子体操学校を創設した時、前述したように、両校の教師でもあったのである。このことは3校の教育に差がなかったことを示すものであるといえよう。

## 5. 卒業生とその就職先

最後に、これまでみてきたように大差ない教育を受けて、明治期の女子体育を背負うことになった各校の卒業生について、その数と就職先から検討する。明治期の卒業生数は表2に示したように、今回用いた資料によると合計678人であり、そのうち、各科を合わせた東京女子体操音楽学校が413人と全体の61%を占める。次いで日本体育会体操学校女子部の177人で、全体の26%である。高等科の人数の方が多い。女高師国語体操専修科は88人と少ないが、東京女子体操音楽学校が明治39年12月の高橋の渡米後、卒業生数が激減してからも各期ほぼ同数の卒業生を出してきた。明治36年3月に高等女学校教授要目で体操はなるべく女教員が当たること

表 2 3 校 の 卒 業 生 数 の 比 較

	明治35年	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45, 大正元年	合 計	
東京女子体操音楽学校 (一部)(二部本科)	15	15	53	93	102	63	25	7	7	4	7	413	
								8	5	2	7 (大正元年10月)		
日本体育会体操学校女子部 普通科			29	8	3	5	1	2	2	5	0	(55)	177
日本体育会体操学校女子部 高等科				12	20	20	15	21	6	19	9	(122)	
女高師 国語体操専修科				21		24		22		21		88	
合 計	15	15	82	134	125	112	41	60	20	51	23	678	

- 注) ・東京女子体操音楽学校の卒業生数は調査年により数種類の人数の違いがある。ここでは明治40年までを明治41年2月の「本校卒業生人名及奉職一覧表」藤村学園関係史料Ⅲ、東京女子体育大学紀要6号、1971年 p.175-183により、明治41年以降については昭和18年12月調の「卒業生に関する調査」同史料Ⅳ、同7号、1972年 p.160による。明治41年4月から修業年限1年の一部と半年の二部本科となるため42年以降は分けた。それ以前の本科、別科は合わせた。
- ・日本体育会体操学校については、「卒業生数一覧」、学校法人日本体育会日本体育大学八十年史、昭和48年12月15日、p.1165-65による。
- ・女高師国語体操専修科については各年度の女子高等師範学校一覧による。

が示されてから女高師国語体操専修科の卒業生を輩出するまでは2年間を要した。この間を補い、また、女高師国語体操専修科が卒業生を出さない年も毎年輩出し、かつ88人という少数を補った点で、短期養成の2校、特に東京女子体操音楽学校の果たした役割は大きい。

専門教育を受けた卒業生の就職先を次にみてみよう。前述したように、文部省無試験検定が認められていたのは女高師国語体操専修科と日本体育会体操学校女子部の普通科のみであった。しかし明治40年頃は「女子教育社会に体育を尊重するに至りしより頓に体操教師の需用を増して文部省の検定試験に合格したるものは三十円以上の月俸にて歓迎せられ、縦令文部省の検定なきものも中学程度の女学校を卒業し多少体操の心得あるものは二十円乃至三十円以上の月俸にて採用せられつつあり、(中略)体育会は日尚ほ浅くして、その成績は見るべきに至らざれども東京女子体操音楽学校は已に六回の卒業生を出し何之も府下及び地方有数の高等女学校に

表 3 3校の就職先の比較

		東京女子体操音楽学校	日本体育会体操学校女子部高等科	女高師国語体操専修科							
		明治41年2月	明治43年2月	明治38	39	40	41	42	43	44	45
公立	高等女学校	45	30	14	12	23	20	30	24	29	30
	女学校	9									
私立	高等女学校	9	30			5	5	6	6	5	7
	女学校	17		2	1	1					
	尋常師範学校	4	5	2	3	8	12	19	14	24	22
	高等師範学校			1	1	2	1	3	3	5	7
小学校	高等	22	4								
	尋常	51									
	東京女子体操音楽学校	1									
	日本体育会体操学校女子部		1								
	進学	3	1								
外	国	高女,女2 7+(5) 師範1 技芸1	1							(1)高女	(2)保母高女
	その他	2		1	2	2	2	1		1	1
	非役			1	2	4	5	7	16	20	18
	死亡	2						1	2	2	3
	不明	169	20								
	計	341	62	21	21	45	45	67	67	88	88

注)・女学校の中には一部技芸女学校等を含む。  
 ・日本体育会体操学校については、日本体育大学八十年史 p.529により、東京女子体操音楽学校は、前出の明治41年2月の「本校卒業生人名及奉職一覧表」から整理し、女高師については各年度の女高師一覧から整理した。  
 ・( )内は他項目で数えたため数えないが参考に記した。

「聘傭されつつあり」<sup>38)</sup>、「(体操学校女子部の)卒業生は未だ左程多数でないが、就職先は頗る良好」<sup>39)</sup>、「(体操学校女子部の)卒業生は多く地方の女学校体育科教員に聘せられる」<sup>40)</sup>という状況であり学校側も就職状況は良いと記している。

明治の初期からキリスト教主義女学校の中には婦人宣教師により他科との兼任で体操を教授される学校もあった。明治35年以後も女学校へ3校以外の出身で体操の心得のある女教師が他教科との兼任で体操を指導するが多かった。明治末期になっても、日本女子大学校の附属高女の体操担当は日本女子大学校で体操を学んだ卒業生<sup>41)</sup>であったし、日本女子大学校卒業の正田ちやうは梅花女学校で宣教師ミス・ラックロフと共に体操を教え、<sup>42)</sup>活水女学校<sup>43)</sup>でマリア・ヤング校長に体操を学んだ広岡しな子は熊本女学校で体操を教え、<sup>44)</sup>神戸女学院でミス・ハッキングや、東京女子体操音楽学校出身の中島キクや山崎仲江に学んだ渡部ルイは英語、数学兼任で、大藪シゲルは修身、数学、理科との兼任で、有田敏は唱歌、英語との兼任で松山女学校で体操を教える<sup>45)</sup>という具合であった。

しかしそうした中であっても次第に3校の卒業生が体操教員として着任していくことになるのである。国語、あるいは音楽との兼任を取った場合が多かったのであろう。表3に示したように、史料に限界があるが、東京女子体操音楽学校については、明治41年までの卒業生のうち約半数は不明であるが、その残りの半数ずつが公私立の高等女学校や女学校と、高等、尋常小学校へ職を得た。師範学校へ就職した者は少ない。そして他校に比べて倍以上の人数が女学校、高等女学校に就職しているのであり、公立の約半数の者が私立へも就職した。日本体育会体操学校女子部高等科については約半数が公私立の高等女学校へ就職し、師範学校へは少ない。普通科の卒業生は小学校の無試験検定を認められていたため多数が小学校へ就職したと考えられる。女高師国語体操専修科は他校に比べ師範学校へ就職する者が多く $\frac{1}{3}$ を占める。高等女学校へも42%のものが就職するが、私立へ就職した者は少ない。また、明治45年には88人中18人がすでに非役となっており、これらは改姓している者が多い。結婚のためであろう。これは体操教員に限らず、女性が職業を持つことの困難さを示すものといえよう。

このように3校はその設置目的にそって卒業生を学校に配してきた。なかでも師範学校へは女高師国語体操専修科卒業生が、女学校、高等女学校へは3校共多いが、東京女子体操音楽学校卒業生の占める割合が高い。

## ま と め

「女子体育は女子の手で」に対応する女子体育教員養成機関は明治32年ごろから計画されたが、他校に先がけて明治35年5月に高橋忠次郎による私立東京女子体操学校が、36年1月には女高師国語体操専修科と日本体育会体操学校女子部が、高等女学校教授要目の制定と相呼応するように設立された。

女高師国語体操専修科は師範学校と高等女学校の体操教員養成、東京女子体操音楽学校と日本体育会体操学校女子部はそれに加えて小学校の体操教員を養成するものであった。しかし明治期においては体操だけの自立は困難とみて、女高師国語体操専修科は、体操と国語を兼修し、東京女子体操音楽学校は体操、音楽に加えて数学との兼修を企て、日本体育会体操学校女

子部も他校との兼修をすすめるものであった。

女高師国語体操専修科の2年から東京女子体操音楽学校の6ヶ月まで修業年限に長短はあったが、体操遊戯関係の授業数について見る限り大差はなかった。女高師のスウェーデン体操重視、東京女子体操音楽学校の遊戯、音楽、普通体操の重視は特色といえるであろう。学校とはいっても女高師以外は借校舎での午後からの授業、あるいは借家での授業と塾風であった。しかし、これは体育だけにとどまらず、今日、女子高等教育機関へと発展してきた私学は皆そうであり、一足先の明治33年に開校した吉岡弥生の東京女医学校も六畳一間の教室、同年の津田梅子の女子英学塾も六畳二間の教室の借家であったのである。私学は経営の困難を乗り越えながら基礎を作ってきたのである。

3校の教員は皆当時の一流の指導者であり、兼務をし教育に当たったのであり、力量の差はなかった。女高師国語体操専修科の卒業生88人を補う形で私学2校は卒業生を輩出し、東京女子体操音楽学校は413人、日本体育会体操学校女子部は177人と次々と全国に女子体育指導者を送り出してきたのである。その就職先も、その目的に応じて3校同じように女子体育を担っていった。なかでも女高師は師範学校の、東京女子体操音楽学校は高等女学校、女学校の先生を多く出したのであった。

指導的立場にあった官立の女高師から一步下って、私立の2校がそれを補う形で女子体育指導者を輩出し続け、今日の女子体育発展の基礎を築いてきたのである。

付記：本研究は昭和55年度文部省科学研究費補助金による研究である。

## 注

- 1) 明治35年5月10日に私立東京女子体操学校として設立され、同年11月26日には私立東京女子体操音楽学校と改称される。本稿では私立を略し以後東京女子体操音楽学校を用いる。
- 2) 明治41年1月には東京女子高等師範学校と改称するが、本稿では以後略して女高師を用いる。
- 3) 西村絢子、「わが国における近代女子体育の受容と変容—明治・大正期における体育留学生(井口あくり・二階堂トクヨ・三浦ヒロ)の業績をめぐって」、日本女子体育大学紀要9巻, 1979, p.82-83, および輿水はる海、「井口阿くり考—外国人留学生報告書をめぐって—」, お茶の水女子大学人文科学紀要29巻, 1976, p.40.
- 4) 学校法人日本体育会, 「学校法人日本体育会日本体育大学八十年史」, 昭和48年, p.82.
- 5) 学校法人日本体育会, 前掲書, p.240-42, p.394-95.
- 6) 高橋忠次郎, 「理論実際小学遊戯教科書」, 榊原文盛堂, 明治39年, p.29-30.
- 7) 掛水通子, 「高橋忠次郎に関する歴史的研究(1)—東京女子体操音楽学校の創立者として—」, 東京女子体育大学紀要第14号, 1979年参照.
- 8) 高橋忠次郎, 依田直伊, 「音楽応用女子体操遊戯法全」, 山海堂, 明治33年, p.1.
- 9) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌3巻6号), 明治37年3月25日, p.34.
- 10) 高嶺秀夫先生記念事業会, 「高嶺秀夫伝」, 培風館, 大正10年, p.115.

- 11) 学校法人日本体育会, 前掲書, p.396.
- 12) 学校法人日本体育会, 前掲書, p.400-401.
- 13) 学校法人日本体育会, 前掲書, p.398.
- 14) 藤村学園関係史料Ⅰ, 東京女子体育大学紀要, 4号, 1969年, p.227.
- 15) 明治36年4月20日, 5月15日, 募集広告。
- 16) 明治37年2月25日, 募集広告。
- 17) 藤村学園関係史料Ⅱ, 東京女子体育大学紀要, 5号, 1970年, p.216.
- 18) 藤村学園関係史料Ⅱ, p.229.
- 19) 女子高等師範学校, 「女子高等師範学校一覧(明治36年-明治37年)」, 明治36年, p.70-71, 4期とも同一の学科課程である。
- 20) 学校法人日本体育会, 前掲書, p.396.
- 21) 学校法人日本体育会, 前掲書 p.326.
- 22) 学校法人日本体育会, 前掲書 p.397.
- 23) 藤村学園関係史料Ⅰ, p.228-29.
- 24) 藤村学園関係史料Ⅰ, p.233.
- 25) 藤村学園関係史料Ⅱ, p.221.
- 26) 藤村学園関係史料Ⅱ, p.216-17.
- 27) 藤村学園関係史料Ⅱ, p.230-31.
- 28) 「日本遊戯調査会の昨日今日」(遊戯雑誌4巻1号), 明治37年4月15日, p.31.
- 29) 峙田かしく(明治36年10月卒)談, 「藤村学園七十年の歩み」, 昭和47年, p.34.
- 30) 森田正馬, 「藤村校長の成功を喜ぶ」(女性美, 4巻4号), 昭和7年,
- 31) 栗原やゑ(明治43年10月卒)談, 「藤村学園七十年の歩み」, p.54-55.
- 32) 吉井定枝(大正2年3月卒)談, 「藤村学園七十年の歩み」, p.63-64.
- 33) 女子高等師範学校一覧・職員, 明治36年~明治45年。
- 34) 学校法人日本体育会, 前掲書, p.397.
- 35) 学校法人日本体育会, 前掲書, p.526-27.
- 36) 「特別広告」(遊戯雑誌6号), 明治35年4月25日, p.62-63.
- 37) 「藤村学園七十年の歩み」, p.34.
- 38) 菅原臥龍編, 「新撰女子就学案内」, 便利堂, 明治39年, p.36-37.
- 39) 高橋都素武, 「全国学校案内」, 内外出版協会, 明治44年, p.234.
- 40) 中村千代松, 「女子遊学便覧(実地調査)」, 女子文壇社, 明治39年, p.94.
- 41) 日本女子大学附属高等学校資料から。
- 42) 梅花学園資料。
- 43) 「活水学院百年史」, 昭和55年, p.68-70.
- 44) 大江高等学校(旧, 熊本女学校)資料。
- 45) 私立松山女学校「年度末調査表」, 自明治40年度至大正4年度。